

在宅復帰にむけた多職種取り組み

筆頭演者：頓宮裕一郎（介護福祉士）

株式会社アール・ケア 看護小規模多機能型居宅介護ハーヴィスプラス

【はじめに】 転倒をきっかけに、入退院を繰り返す利用者C様の、“住み慣れた自宅で過ごしたい”この思いを叶える為、退院後の在宅生活の実現に向けて、多職種が協働して取り組んだ症例について発表する。

【事例】 C様：77歳、男性。一軒家に独居。小児期による右半身不全麻痺。平成30年X月、自宅で転倒し、入院。退院後の暮らしについて、医師からは、家庭環境や繰り返される転倒に、自宅の生活には限界があり、入居施設への入所を勧められる。C様も、繰り返される転倒に、施設入所を考えるようになったが、自宅での生活を諦めなくなかった。その思いを叶える為に、多職種が協働して、在宅生活の実現に向けてプランニングを行い、身体機能と生活環境の見直しを行った。

【経過】 退院後より、ロングステイを導入し、余暇時間に、リハビリ職による個別リハビリ、集団体操を取り入れ、筋力向上へのアプローチを開始した。自宅環境の見直しでは、本人とケアマネージャー、リハビリ職、福祉用具が介入し、問題点を抽出した。自宅の環境に近い状況を再現し、在宅復帰後の生活を、イメージ出来やすいものにした。生活が安定してきた所で、一時帰宅を行った。

【結果】 リハビリ職による身体的なアプローチと、多職種による専門的視点により、住環境の見直しを行ったことで、在宅生活を実現することが出来た。